

通崎睦美（木琴）

2005年に平岡養一の愛用した木琴を譲り受けて以来、前半に木琴、後半はマリimbaというコンサートを展開してきた通崎睦美であるが、近年は木琴のみのリサイタル「木琴文庫」をスタート、今回はその第2回である。共演はピアノの西脇千花、リコーダーの本村睦幸。

打鍵楽器であるから、物理的なレガートには向いていないはずなのだが、通崎は精妙に揺れるテンポやルバートを駆使して見事にふくよかな音楽を織り上げていく。モンティ《チャールダーシュ》では絶妙の起伏や振幅、またデュナーミクによって浮き立つような躍動感と疾走感に溢れるドラマが構築される。

驚かされたのは、モーツァルト「ヴァイオリン・ソナタ」K305 第1楽章である。楽器的には対極にあると言っても過言ではないが、ヴァイオリンとはまったく異なる風趣であり、原曲の香りとは遠いもの不思議な温かさと説得力に満ちた感覚に驚きを禁じ得ない。それはモーツァルトの楽曲の奥深さをも俯瞰した独特の表現であり、と同時に木琴という楽器の可能性をも押し広げることにも繋がるのであろう。他に当摩泰久編曲の《アマリス》、ともに委嘱作である野田雅巳《五〇年》、伊左治直《スパイと踊子》など、いずれも自然な感情の発露と斬新な情景が余韻嫋々たる音楽的感興を湧き起こした。（10月10日・東京オペラシティ

〈小〉

〈真嶋雄大〉